

京の教員特別セミナー 「小学校教員理科研修」 レポート

アート・コミュニケーション研究センター 講師・研究員
北野 諒



京都大学と京都府教育委員会の連携事業である小学校教員理科研修が、平成25年7月31日～8月2日の3日間、京都大学や花山天文台を会場として開催され、18名の小学校教員が参加した。本セミナー1日目は 京都大学総合博物館が会場となり、京都造形芸術大学より水野哲雄(子ども芸術学科教授)と福のり子(ASP 学科教授)が講師として登壇した。

本セミナーに水野教授と福が講師として参加するのは、昨年、一昨年に引き続き、今回で3度目となった。このレポートでは 1日目の水野・福の講義概要を紹介する。

感覚(感性)を開き深めよう

セミナーは、水野教授によるワークショップ「感覚(感性)を開き深めよう」からスタート。ワークショップは全部で4つの短いワークから構成されており、身の回りの日用品を素材に、様々な遊び方をしてみることで、感覚のあり方が変容していくことを体験した。

1つ目は、目の下に鏡をあて天井を見ながら歩いたり、紙の上に置いた鏡を見ながら鏡のなかで読めるように文字を書いたりするワーク。2つ目は、3本の針金を用いて各自がはりがね人形を作り、人形をとおして「ごっこ遊び」のようにコミュニケーションする

ワーク。3つ目は、自分の持ちものからランダムに5つを選んで紙の上に広げ、「顔」に見立てて並びかえ、プロフィールなどを考えてキャラクター化するワーク。そして最後の4つ目は新聞紙を「ひたすら揉む」ワーク。

それぞれ素材は違えど、自分自身の感覚に耳を澄ませ、身体をとおしてそれら表現していくことで、自らの感覚や認識が、日頃の習慣や経験によって主観的に形作られていることを、一連のワークショップを通して気づくことができたのではないかと思う。手を動かして積極的に参加するワークで、先生方の緊張も和らいだようだ。

「みる」ことから始まる「発見」&「コミュニケーション」

午後からは福によるレクチャー「『みる』ことから始まる『発見』&『コミュニケーション』」が行われた。まずは理科と図画工作の学習指導要領を参照しながら、美術が「知的探究心を刺激し、目的意識をもった観察力を養う」という理科の目的と相似した特性を持つことを挙げる。そして本講義のテーマでもある「みる」「発見」「コミュニケーション」が、両教科における重要な共通項であることを述べた。

その後、美術における鑑賞教育の現状、アートとアート作品のちがいを意識をもって「みる」こと、京都造形芸術大学でのACOPの取り組みなど、「みる」「発見」「コミュニケーション」というテーマの基に、様々なトピックの話を展開していった。

レクチャーの後は福のナビゲーションのもと、実際に対話型鑑賞が行われた。時折、今この場で何が起こっているのか、ナビゲーターが何をしようとしているのかといった、場・ファシリテイトの振りかえりを挟みながら展開していく。また、根拠をしっかりと言語化すること(「どこからそう思ったのか?」)と、同じ物を見てもそれぞれが異なる解釈していることを認識することの重要性を、鑑賞のなかで繰り返し指摘した。参加者は複数人で作品を鑑賞することの楽しさを、時間いっぱい堪能したようだった。

この講習会への参加も今年で3年目。「理科」の講習会に、ACOPを取り入れたり、逆にACOPでの講習に京都大学総合博物館 館長である大野教授に参加して頂いたり、教科を越えた学びの実践が着実に蓄積されつつある。さまざまな学びの基礎・総合となる「鑑賞によるコミュニケーション教育」の視座を、今後も深めていきたい。